

第7回長崎県海岸漂着物対策推進協議会議事録

(田中総括課長補佐)

では、最初に糸山会長よりご挨拶をお願いしたいと思います。

(糸山会長)

どうも皆さんお久しぶりでございます、糸山でございます。本年度としては二回目の漂着ごみ対策協議会でございます。本当に今、長崎県内のあちこちで漂着ごみの問題ではお困りになっている、いろんな問題をかかえている、どういう問題に直面されているのか、それぞれの状況というのを我々がみんな、少しずつ知っていこう、情報を共有していこう、それから、そのときに基本的には色んな活動を実際におやりになっている、その活動そのものが支えあうような、緩やかな結合体というものが作れたら良いなあと、大分、課長と話をしておりまして、係の皆さんともそういう話をしてまいりました。今回、事務局のほうから、そういう私の意図を含めた格好で、一つのモデルが提起されておりますので、これを皆さんと一緒に議論しながら、緩やかな形ですけど、お互いが共有できたら、活動を支えあうような状態が出来たら良いなあ、という風に思っております。どうか皆さん、忌憚のないご意見を、是非、色んな方面から提示していただけたらありがたいと思っております。宜しくお願いします。それで、会議に入ります前に、今回始めてご出席されておられます吉村委員さんから自己紹介を兼ねてご挨拶頂きたいと思っております。吉村委員さん、よろしく申し上げます。

(吉村委員)

こんにちは、吉村でございます。私は、平戸市の市民課長をさせていただいております。平戸市についてはほとんどが海岸線に面しておりますので季節風に乗って毎年、海岸には漂着物が漂着しておると、その領域も広大だということで、昨年までニューディール基金事業で100%の補助事業で回収事業も行えたところでございますが、今年度からないということで県の事業に切り替えてまた頑張っています。まあ、この漂着物の問題も、今日の委員さんの皆様方の良いお知恵をお借りしながら、今後も行政としての漂着物の対策を取っていきたいと思っておりますので、今日は宜しくお願い致します。

(田中総括課長補佐)

ありがとうございました。それでは、議事のほうに移りたいと思いますが、今日は微妙な天候で暑いかと思います、ただ、もう、十月ですので冷房を入れておりませんので、県庁もまだ、十月いっぱいクールビズということになっておりますので、みなさまも上着などご自由にお脱ぎになってください。それでは議事に入りますので、今後の進行につき

ましては、糸山会長にお願い致します。宜しく申し上げます。

(糸山会長)

それでは、議事を進めて行きたいと思えます、それではまず、第6回の協議会の確認事項について事務局から説明をお願いします。

(西村係長)

廃棄物対策課西村です。座りまして失礼します。まず、資料の1をご覧ください。1ページにございますように、前回の第6回協議会における確認事項ということです。第1項目といたしまして参考資料の5ページにございましたパトロール、海岸漂着物の発生抑制がある中で西海市の去年1年間の緊急雇用対策事業ということで、臨時職員を1年雇用して不法投棄パトロールと清掃をいたしました、という回答がございました。次に二番目の項目ですが、前回資料1の8ページ、9ページの日韓海峡海岸漂着ごみ一斉清掃、その回収量と範囲について質疑がございました。立方メートルかトンかというお尋ねですが、トンということになっております。その結果は3ページにお示ししておりますとおり、当時の資料に右端に回収量がそれぞれの年度でございますが、トンと入れてございます。前回もここが抜けてございましたので、よろしく申し上げます。

次に3番目でございますが、前回資料2の日韓海岸漂着ごみ一斉清掃の参加人数について委員様からお尋ねがございまして、1千名では少ないのではないかと云った内容でございましたが、別添資料の3ページにございますように長崎県参加人数11,072名ということになっております。内訳につきましては、5ページ以降にお示ししております、総数は8ページに掲載しております。以上でございます。それから、4項目といたしまして、相手国・韓国側の考え方、ということで、直接の回答になるかどうかは分かりませんが、この事業のスタート当時の共同声明文を9ページから掲載しております。その9ページの3項目目に罫線を引いておりますとおり、「海岸漂着ごみが地球環境に与える影響に鑑み、海の世界美化に対する意識啓発を図るため、日韓海峡の海岸の一斉清掃等の具体的な取り組みを進めることとする」と記載されております。それからページは飛びますが、11ページに「長崎県」というところがございまして罫線を引いておりますが、「大量に押し寄せる漂着ごみの回収処理に苦慮している、韓国の皆さんには悪いが、ほとんどが韓国から漂着しているのではないかと。最近では、地域の皆さんと連携して日韓で海の世界をきれいにしようというキャンペーンを2003年から2005年まで取組み、2006年から2009年までは日韓学生つしま会議を実施し、日韓の学生が一緒になって海岸清掃を行い漂着ごみの原因対策などについて意見交換を行う。今年7月15日から海岸漂着物処理推進法が施行され、2009年から2011年まで地域グリーンニューディール基金を活用し漂着物の回収処理、発生抑制の取組を行い海岸における良好な海岸保全を推進していきたい」と、ここで述べております。それから、ちょっと山口県の発言は飛ばしまして、次のページに全羅南

道の考え方ということで、ちょっと長いので、はしょらせていただいてようございますでしょうか。「良いと思う。海岸ごみの問題は、海を挟んだ国の共通関心。全南でも、海岸ごみの対策では非常に頭を悩ませている、日本は、ごみの相当部分が韓国から流れてきたといわれたが、我々の調査では、中国から来るのが 70%くらいある。中国に提案しようとも言っているが、潮の流れを見ると、中国から南の方にきて、潮の干満でごみが行ったりきたりする。仁川で引っかかったり、全南まで降りてきたり。雨が降ったとき、陸地から海にごみ流れ出て、海岸に打ち上げられる。雨が降ったときは、そのごみをどのように処理するのか、ヨンサン河の河口の直前に大きなごみ回収場を建設した。そこで回収しなければ海に出て行き、回収コストが高く付く。政府と全南が半々で負担し、河口に両方クロスする網を設置して、全部回収するというシステムを作っている。」というふうにございます。以下はごらんのとおりということで、これが向こう側の考え方かなということで一例を示したつもりでございます。以上でございます。

(糸山会長)

はいどうもありがとうございました。これは第 6 回の協議会での確認事項でございます。宿題になってきた部分を当局の方で集めて頂いたものです。今、一番最後の日韓のこの海岸漂着ごみの一斉清掃のそれぞれのものの考え方についてご紹介がありましたけれど、なかなかこういうものを見る機会がなかったということで、こうやって見るとお互いの考え方の違いというものが出てきて、ある意味、興味深いなぁといたしましたけれど、他に何かご質問とかございませんでしょうか？はいどうぞ。

(山本委員)

山本と申します。私はここに先に参りまして読ませてもらいましたが、前回、糸山先生が漂着ごみに関しては犯人探しはしないということにしようとおっしゃいました。長崎県のところを見ると、韓国の皆さんには悪いなぁという表現で書いてありましたが、全羅南道の方は中国地方のほうから 70%くらい来るといような形で書いてありまして、私も公募に資料や作文を出したときに、本当にドイツと中国と環境のことで学ばせていただいたこともあるんですが、大変、中国の方のモラルとかいうものが悪いとだんだん海にたどり着くのではないかと感じがしたんですけども、その後に東日本大震災がありまして、カナダとかに日本の震災の方の漂着物がたどり着いたということで、本当にその後にこの会議に出まして、絶対に犯人探しをしてはいけないんじゃないかと思って、世界全体で地球を守っていかなくてはならないし、自然の生態系を守っていかなくてはならないと思いついて、ちょっとこの文章を読ませていただいた感想なんですけども、以上です。

(糸山会長)

本当にありがとうございます。あの、本当にそう思いますし、川口委員さんは今までも

っと関わってきた事もありますし、何か一つコメントをください。

(川口委員)

山本委員さんからのご指摘のとおりですね、もう本当、私も申し上げるとすれば、山本さんのおっしゃったことを私も言いたいんですが、ただ、これに関して受け取り方の問題であると思うんです。学生諸君、若い人たちに、私、一緒にやって、常に思ったのは、環境保全の、要するに、誰が山本さんのご指摘の犯人とかではなくて、こういうものが自然の流れなんだと、要するに風が吹けばごみが舞いちって海まで流れ出ることもある訳で、そういう意味で言うと、愚の骨頂といえますか、犯人探しだったらそんなもんじゃない、ただ、現実を見てほしい、その中で若い皆さん方に発信力といえますか、ご指摘のあった韓国のごみなんですけど、若干、減ってきているような認識を持っています。これは自然のなせることであろうことかと思えますし、逆に言うと参加してくれた韓国の学生諸君が、啓発をしてくれているんじゃないかという話も耳にしていますんで、そういった地道ではありますがエンドレスでございますので、そういったことが余計に、そういう感情を私自身が受け取っているのか、ただ、本当にご指摘のとおり、決して犯人探しではなくて、原因究明は必要なんです。ですから、それが、どういう形で流れていっているのかというのを突き詰める。そのための一つの体験として、現実、こうだ、というのを皆でやってきて良い経験を私自身もさせていただいて、これからも、そういうスタンスは維持していきたいな。ただ、韓国の学生、これは国民性だと思います。やはり、日本にいる我々もそうだと思いますが、敵視する相手がいないとなと思いましたが、こういったことを本来は口にも出したくないし、文言としても取り扱って欲しくないな、という部分もあるし、常に前に行くために、じゃあ現実を前にして、どう処理していこうかと、それが皆さんと合意形成しながら進めていくのが、それに携わる我々の責務ではないかと思えます。長くなりましたが、私自身もそういうつもりで少しでもお役に立てればと考えています。ありがとうございました。

(糸山会長)

どうもありがとうございました。あの、私も過去、長崎県の発言といえますか、その部分に書いてあります、大部分は韓国から漂着しているのではないかというところは、原因の追究といえますか、原因を極めていくという風に読んで見ました。それから、そういうことがあるから韓国側のこういう方策をやっているよと。中国から南のほうに来て潮の干満の差で行ったりきたり、仁川に引っかかったり、全南まで下りてきたりしたときに、陸地から海にごみが流れ出て海岸に打ち上げられる、雨の降ったときはそのごみをどのように処理するのか、ヨンサン河の河口から直前に大きなごみ回収場を建設をした。そこで回収しなければ海に出て行き回収コストが高つく、とありますけど、こういうのを逆に言うと、情報を共有するというのが、本当は海のごみを減らしていく、大きな力を発揮す

るんじゃないかというところが、僕の想定していることであります。そのようなことから基本的には共有しながらつくれていけたら良いなあと考えております。他にございませんでしょうか？はいどうぞ。

(山口委員)

私、長崎県漁連の山口と申します。今、皆さんがおっしゃられたことは、大変人としては良いことであると思えますし、そう感じて動かなければいけないんでしょうけど、実際に流れてくるごみの中で本当に劇物とか危険物とかは、大量に、たとえば酸処理剤とか大量に流れてくる場合があるんです。そういう問題が結構発生している中国とか、韓国とかのハングル文字、中国文字、だから私は、県としては国家間の問題は、こういう場所ですっきり言うておくことも必要ではないかと、感じております。だから、こういう犯人探しじゃないけれど、実際にそちらのほうから流れてくるんだから、もう少しモラルを考慮してもらいたいということだと思うんですね、ニュアンス的に、ということではないかと思えます。一言だけ言わせてもらえば。

(糸山会長)

まったく山口委員さんのおっしゃる通りだと思います。ですから、そこにそういう会話のやり取りができるようになるまでつくっていきたいということでございますので、やっぱり、モラル的にそういうものが流れてきてるということを知ってもらわないとどうしようもないし、原因を知ろうというのは、そこを向こうにも知ってもらおうと、そういう形で向こうにモラルなりなんなりを求めていくということが必要になってくるんだろうなあとおもっております。はい、ほかにございませんでしょうか？はいどうぞ。

(田中総括課長補佐)

ちょっと補足させていただきます。いまおっしゃったように、市民レベルでの交流とか活動の中でやっていく場合に、犯人探しということは置いてその事実としてはお互いにきちんと客観的に見て、感情的にならずにという大事な部分がありますが、今おっしゃったみたいに国家間ですとか、行政同士の話の中ではモラルプラス、その国の制度とか、そういったものも関わってくると思えますので、そこはきっちりやるべきことはきっちりやるということで、国に対してもですね、お願いを皆様と一緒にしていきたいということでございます。もう一つは、韓国の認識についてこの資料は当時の知事が直接話をしていてでございますので、多少、知事さん知事さんの考えでのニュアンスが入っているのかと想像するんですが、私に対馬の上県の交流員さんをされていたパクさんと今でもやりとりがあるんですが、KBS、向こうのNHKみたいなものですが、特集番組を2年位前ですか、このごみ処理の関係を作ってます。日本語等の字幕を付けてもらって、見せてもらってうちにもあるんですが、やはり、向こうもですね、いろんな科学的な視点で客観的に

見た番組をきちんと特集されてましたので、そういう意味ではすごく、こちらとしても共通の認識を持ってると、確認できてますので機会があったら見ていただくようにしたいなあと、そういったことも補足させていただきます。

(糸山会長)

ありがとうございました。ほかにございませんでしょうか。はいどうぞ

(川口委員)

今の総括の話で思い出したんですが、実は平成19年に実はそれを踏まえてシンポジウムなんかやりたいなと言う話を正直言いましてご提案したことがあります。県を通じまして外務省を通じまして、そしたら、ご丁寧にお断りされました。それはまあそれとしていいんですが、ただ一つだけですね、我々側のスタンスとして県にこれもお願いなんですが、その時の平成18年のほうがベースになっていて、18年度の実は今日、いらっしゃるのかな、メディアの対応が、韓国バッシングだったんです。要するに、君らのところから流れてきた、大変迷惑だよという変な書き方、私が読んででも、いや、ここまで書く必要あるかな、と思えるくらいの論調だったんですね。で、お断りされる側の話をお聞きしたら、田中さんがおっしゃった、パクさんから言われたんですが、それを、韓国なり、長崎でやろうとした時に、いずれにしても、韓国バッシングの場になりやすいんじゃないかと、予算の関係もありまして、19年といたしますと県の日韓の学生つしま会議の予算がきまりましたので、長崎で開きたい、というご提案をしました。そうしますと、貴国でやれば、逆に私どものほうがバッシングされやすい。それで、まあ、言葉にはならないけど一応私共のほうにお断りをされてきた。そういう意味で言うと、もう少しメディアをどうにかしろじゃないけど、そこのところ、メディアに対する啓発もぜひ県のほうもご協議していただけないでしょうか。我々が申し上げるのも最後だから県のほうも犯人探しというよりは、皆で地球規模でこういうものに対して、山口委員のご発言はですね、環境美化の側面だけではなくて、要するに、生活圈も侵される、といったことも含まれていますので、そういう意味でいいますと、行政のお力も是非ですね、いただければですね、啓発も進んでいくのではないかと。発生抑制のための、ひとつの手助けにぜひ、御尽力を賜りたいなあと、よろしくご検討ください。

(糸山会長)

ありがとうございました。そのほかにご質問は・・・

(三原委員)

この間、糸山会長さんからご参加いただきましたが、日韓のビーチクリーンはですね、あの時に、ぼくはちょっと気になったのが、当時、大浦課長さん達のいわゆる説明ですね。

こういうのがあったら危検だ、ああいうのがあったらとか説明をいただいて作業に入ったんですよ。そのあとですね、注射器に入れる液の容器ですね、あれが、ハングルで書いてあったんです。ハングルで書いてあって読みきれなかったもんだから、学生に聞いたら、こういうものも流れるんですね、大変ですね、という言葉をいただいた。だから、犯人を捜す、捜さんという問題のまえにですね、そういう認識を持つということがいかに大事かと思うんですね。で、この間の3.11の東日本大震災の際の漂流物の中で、アメリカでハーレーが流れ着いたという、そういう品物まで流れるのかと、あれが浮かぶのかなと、実はその時に一緒に森調査官と対馬の海岸を見て回った。全部じゃないけど一部をですね。上から見るとそうないんだけど、海岸に下りてみると、やっぱりこんなにあるんかと。で、韓国のがどうやこうやじゃなくて、やはり韓国ばかりですよ、それで、災害があってもですね、500ぐらいあるうちに二つ三つあるかないか、みたいな感じがしました。だから、犯人探しがどうのこうのという前に、長崎県なら長崎県、対馬なら対馬として、世界は世界としてですね、お互いに犯人探しをしなくて良い、大人のモラルとしてですね、認識が必要だと思いますよ。現実、あるものはある訳ですから。何であるのか、というのが大事だと思います。

(糸山会長)

はいそのとおりだと思いますよ。 はい、課長。

(小嶺課長)

まず、川口委員のお話の件なんですけど、確かにそういう報道もあったようです。私もずっと日韓学生会議のほうの担当をしていたもんですから、そういう報道がなされたということは大変残念だと思ってます。糸山会長の犯人探しをしないという考えというのはですね、私ども、国民と言いますか、民間同士でやるなかでは大変なことであると思います。そういうことで、糸山先生の考えとしては、だいぶ、浸透してきてですね、マスコミの証言など論調などもだいぶ変わってきたのではないかと思います。県内では確かにあるなと思ってます。ただ、行政としてですね、国、県として対岸国である韓国、中国、色々あるんですけど、そういうものに関してはしっかりものを言わなくちゃいけないだろう。国に対してもしっかりものを言ってくれということは私どものほうでも、そこはそこです。日韓の実務者会議というのが最近あってないんですけど、過去2回あったんですが、そういう場にも県から出て行って韓国の行政の人たちに対してですね、対馬の現状を写真などを持って行ってしっかり伝えるとか訴えるとか、そういう活動してますので、今後もそういう民間交流との部分とですね、行政がしなくてはならない部分としっかり取組んで行きたいと思っています。それから、韓国の漂着ごみが減ってきているのではないかということですが、一概に減ってきているのかどうか検証をしていないんですが、19年から比べますとですね、廃ポリタンクとかですね3分の1くらい、漂着量が減

ってきています。少しずつそういう考えがですね、諸外国に対しても浸透してきているのではないかと思います。

(糸山会長)

ありがとうございます。

(白石委員)

上五島の白石です。上五島の現状というなかで、ちょっと思ったものですからご紹介したいと思います。22年度と23年度にグリーンニューディール基金を使いまして、海岸の、人が行けないところ、船でしかいけないところを重点的に海岸清掃をしました。その中で、もちろん韓国とか中国とか外国製のものが多くあります。だけど、それよりもそれ以上にあるのが発泡スチロールなんです。それも、家庭から出る発泡スチロールではなくて、漁船関係の発泡スチロールがほとんどなんです。遠くから島を見たら真っ白なんですね。発泡スチロールの白さで、海岸線がですね。だからもちろん、外国の肩を持つわけではないんですが、日本の方にも問題があるんじゃないかと思うんですよ。私はないんですが、漁民の、漁船関係の方が台風が来ても流れないような縛り方をすれば、こういう事も防げたんじゃないかと思います。発泡スチロールとか、丸いブイがほとんどですね、だから、犯人探しじゃないんですけど、ここら辺ももう少し考えてほしいなあと思います。以上でございます。

(糸山会長)

はい、ありがとうございます。全くそのとおりだと思います。先ほどからずっと出てることも全部そういうふうにしておりまして、犯人探しはしないけど、やっぱり原因はしっかり知っておかなくてはいけない。それが非常に重要なことです。犯人探しをしないということは、もう一つこういうこともありまして、例えば韓国からのごみが多いとか、中国からのごみが多いとかいう言い方をすると、逆に言うと自分達のごみは少ないんだという風な言い方になってしまうという。で、やっぱりそれを許さないためにも犯人探しにはしたくない。だからやっぱり実情をきちんと知ることが何よりも重要で、そのところは情報を共有していくということ、これから先はやっていくんだということが、重要なのかなと思いながら先ほどからの議論を聞いておりました。他にございませんでしょうか。はい、どうぞ。

(森委員)

環境省の森です。今日はデータでお伝えしておきたいと思いますが、環境省が各県にお願いして調査をして、その23年度のデータが9月27日に出ましたので簡単にご紹介すると、ポリタンクはですね、17の都道府県で1万個約見つかっております。そのうちの

半分5000個には韓国語の標記がございました。そして医療系の廃棄物は7県の海岸に約2000個漂着して、その中には注射器とか薬ビンとか多数見受けられました。それからうきですね、特定漁具ということで、8000個見つかりましてね、そのうち4000個は中国語の標記があったということでございますので、この数字についてはきちんと日、韓、中、間で話し合いをするときには伝えたいと思うところでございます。

(糸山会長)

ありがとうございます。やっぱり、そういうデータも語るには必要かという気がしますんで、ほんとうにありがとうございました。貴重なご発言だったと思います。ほかにございませんか？はい、どうぞ。

(田中委員)

五島の田中と申します。さっき聞いたら、医療関係が2000個流れてくる。韓国からのが多いと環境省の方が言いましたが、医療系ですね、その医療系の針とかが、対馬でも多かった。なんで医療系の針が流れてくるんですか。韓国あたりは治療とかが終わった後、きれいにする機関はないんでしょうか、というのも聞きたいんですけど。危ないですよ。本当に危ないんですね。先週我々も五島で、会員は30人くらいいるんですけど、ボランティアで10名くらい集まって、みんな忙しいもんで、鏡瀬海岸という有名なところがあるんですが、そこを漂着物の清掃をしたんですが、やっぱり韓国のペットボトルが多いんですね。で、中になんか入ってるんですよ、先輩方は「いや、それは開けたらいかん、それも、怖いものが入っていたら、我々は死んでしまうぞ」というふうなことがあるもんですから、開けなかったんですけども。発泡スチロールとか、柿色のブイとか10袋くらい、数時間で取れないくらいあったんですけど、後で役所のほうには伝えたんですが、だから、医療関係は特殊なものだと思ってね。それをなんで流れるのか不思議で、どこかできれいに処理して、流れないようにしないと大変なことになる。どこの国か分からないけど、それだけはなんとかしないといけない。

(糸山会長)

これは各国とも医療系の廃棄物に関しては法的な規制をしてるんですよ、それが不法に捨てられているというなことで、針のついたままというのは非常に危険でございます。しかも我々が見つけたもの、今話がありました発泡スチロールとか、ぶかぶかしたその中にもぐりこんでいるという事例がかなりあるもんですから、その危険さがもっと倍加しているというところがある。川口さん、針がついた注射針をそのままじゃなかったですか。

(川口委員)

18年度から対馬に清掃に行きまして、一番大きかったのがですね、クーラーボックスいっぱい、最初の年の18年度には、せいぜい10本くらいだったのが、21年度にですね、それはたまたま流木の下に隠れていた。先生ご指摘の発泡スチロールはそういったものの中に、やはりこれはもう、今、田中委員がご指摘になられた要はモラルハザードになっていますんで、そういったところの啓発をやっていくしかない。先生が言われる法的な規制をくぐってでも、やっぱりそういうふうな海上に不法投棄などを悪いことをなさる人がいろんな国にいらっしゃるんだらうというふうに理解をしたうえでそれを見つけた我々がこれを対処していくしか方法はない。と同時に啓発を進めていくしかない、そういった流れでやっていかないと、いつまでたっても堂々巡りといいますかいたちごとこということになろうかと思いますが。

(三原委員)

医療機器、たとえば注射針とかですね、人に使ったものか、動物に使ったものかわかりませんか。

(川口委員)

それはわかりません、回収したときにはもう検証しませんでした。私が聞いていたのは、動物に使っていたのが結構あると聞いたもんですから。いずれにしても、動物であれ、なんであれ、要は注射器、そういった医療系の廃棄物が流れてきていることが事実ですから。それをどう対処するか、ということに、我々は次の手を打つことが大事だろうと。

(糸山会長)

はいどうぞ。

(石橋委員)

熊本県立大学の石橋です。私は JICA の医療廃棄物の処理の専門家として、南太平洋の小さな島国を5年間回りまして指導した経験があるんですが、そのなかで WHO がきちんとしたですね、回収と処理指導をしているんですよ。で、その医療機関に関してはきちんとやられているんですけども。多分、中国とか韓国とか、ある程度の処理業者さんができているところだと、回収して不法投棄してるということがあると思う。そういうものが流れてきているんじゃないかなと思う。

(糸山会長)

多分、そうだと思います。そう、だから、点滴の注射針のようなものが入ってましたから、今川口委員が言いましたように、平成21年の御前浜の海岸清掃を行ったときに、実

は見つけたものなのですが、あのときは多かったね、たぶんあれは県も写真はお持ちでしょうから、本当にこんなに多いのかとびっくりした経験がございますが。他にございませんでしょうか。

(中山委員)

中山と申します。後から話そうかと思ってたんですけど、せっかくですから、この、あの、8月にですね北東アジア青少年環境活動体験プログラムという、環日本海環境協力センターと富山県主催でですね、子供たちの日本海に面した海域のですね、プログラムがあって参加してきたのですが、その中で壱岐の海岸漂着物をパワーポイントで説明したんですね。向こうの子供たちはみんな驚いているわけですね。その反面、中国・韓国・ロシアの海岸はほとんどゴミがないんですね。ですから、子供たち自身は自分たちの国のごみが日本に流れていると知らないわけですね。向こうはどこにも流れていない。ほとんどない。中国なんかごみを探して回っている状態と、プログラムの発表であってですね、そういうことですね。今、医療系廃棄物のことが出ましたが、これは、誰かが意図的に、故意としか思えないんですね。3・11がありました、3・11は自然災害ですから、故意とはいえないんですけど、そういうことですね。子供たちを含めた啓蒙活動というのは必要ではないかと思います。という風に感じます。

(糸山会長)

今、中山委員さんが言われたように、啓蒙活動、啓発活動というのはポイントであろうと思います。ほかにございませんでしょうか。ちょっと時間がオーバーしておりますので次の議題によろしいでしょうか？では、次の議題に移ります。それでは情報共有のネットワークということで、事務局からお願いします。

(西村係長)

資料の2ということになります。(以下、資料により説明)

(田中総括課長補佐)

ちょっと補足をすみません、県の職員ができないところが非常に先立ってしまったので、気持ちが先走ったのかと思いますので、そもそもの考え方からちょっと。私自身もですねこの分野でなく、自然の生き物とかでいくつかこのメーリングリストを使った情報交換の登録を四つか五つくらいしております。ひとつは、なるべくたくさんの方が参加しやすいというのが第一だと思いました。だいたいメールを使える方は多い、ほとんど皆さんの中でもメールを使える方は多いと思うんですね。ただ、ネットを使えるパソコンをお持ちならば、ウェブサイトへ接続され、ホームページとかブログを見られているかと思いますが、

その既存のいわゆるソーシャルネットワークサービスとかフェイスブックとか、そういうものに直接入られてる方はやっぱり絞られると思うんですね。なるべくたくさんの方に入っていただくためには、メールというやり取り自体は、自分で、こうメールをチェックさえすれば見られる、アクセスしなくても見られる。一番裾野が広いだろうというのが最初の考え方の始まりです。このメーリングリストという方法自体は、通常、普通に参加していれば、普通にメールのやり取りができるだけで添付ファイルがついてきたりします。で、いろんな各社のサービスによっては広告が入る場合もありますが、それも慣れればたいしたことないし、あまり目立たない会社のもあります。メールのやり取りだけです、基本は。ただ違うのが、あて先がグループの名前になりますので、グループに所属している人には一斉に送られて、一斉に受ける、同じものを出したり受けたりできると、いうことになっているんですよ。だから、非常に取っ付きが早いと。楽だということ。それともう一点は大体このやり方ですと、メールのやり取り以外にもネットのウェブ上の掲示板みたいなページが作れるようになっているので、その会員さんの中でのメールだけじゃなくて積極的にサイトに接続することのできる方でしたらば、そのページの私たちのグループのウェブにアクセスができるので、ちょっとメールで送れないような大容量の画像とか、画像をそこに乗っけたりすることもできます。過去のやり取りを、もちろん自分のメールの保存箱でも過去のものとか全部わかるんですけど、それ以外にも本体のウェブのページにも過去のやり取り、過去の分みたいなものが出てくるとか、とういうようなことも出来ますのでどちらの方も対応出来る、というのがひとつ。最初やはり、そういうことで沢山の各世代の方が参加できるという形で、要は情報交換の頻度が高くなって、皆さん、今日はせっかく集まれて今、大分、いろいろなお話をされていますが、ちょっとした質問とかもそこに気軽に寄せれば誰かが答える、という、たとえば、先生も入っていただけたら、先生から返事が返ってくるかもしれない、というところからはじめていけば、広がって継続していくのではないかと思います。そういうことで、この仕組みをご提案しました。それともうひとつは、その管理人さんという方がやっぱり、どうしても必要で、実務的にどうしてもしていただきたいことが、登録の行為というのはやはり、管理人さんに関与していただかないといけない、その事務は簡単なものです。もちろん、県のほうもサポートしますし、そこがひとつ、それと、われわれ県のほうでは、いちいち制限がかかってややこしくなるというがあるので、継続的に、年度替りで、一々人が変わったときに、遠慮がちになってなかなか会話が進まないなどがないように、ずっと継続していただける方に中心になっていただいて運営していただけないかと、いう趣旨でのご提案です。

(糸山会長)

私のほうからもちょっと説明をしておきます。事務局と私とで話をしたのが、緩やかな形でのみんなの集まりというのが出来たらいいですね、というのが元々だったんです。その時にみんなで、こう集まって、本当なら、こう顔を合わせながら、うちではこうだよ、

とか、こんな問題があるんだよね、という話ができたら一番良いなあというふうには思っていたんですけど、実際にみんなでどこかに集まるということは実情にも非常に難しいと。一般的にも非常に難しいと。そういうことをいろいろ考えている中で、そういうメーリングリストを使って、緩やかにお互いの情報を共有できるような結合体ができたら良いかと、そういうふうにした次第です。それこそ、昨年10月23日に長崎で海ごみサミットをやったんですけど、その時に、こういう組織を作りましょうねという提案をしたまんまで、その後全然進まなかったということもありましたけど、そういう意味で、こういう緩やかな感じで、今、事務局からの説明もありましたけど、メーリングリストを管理する人をどこかで引き受けてさえくれれば、こういうこともうまくいくんじゃないかということなんですけど、ここにいる委員さんすべてに、このメーリングリストに入っていて、必要なことがあれば情報を発信する、たとえば、この会議の議事録みたいなものもここで出すことができますよね、だから、たとえば10月25日の会議ではこういうことが議論されましたよ、こういうことが決まりましたよ、とか、次回こういうことをやりますよ、とか、というようなアナウンスであるとか、そういったことがこの中でやれたら良いなあと、そういう趣旨でございます。なにか質問とかございませんでしょうか。

(石田委員)

前回参加させていただいたときに、会長からネットワークの宿題がだされ、ネットワークとは何だろうと自分に問い詰めまして、私なりに考えましたら、ネットワークはいろんな形があるかと思いますが、行政・国・県・市町村と、それぞれ民間団体とのネットワーク、あるいは、いろんな会員同士のネットワーク、民間団体と一般県民・個人・ボランティアとのネットワーク、というものがございまして、今回このネットワークというものは全部網羅するものなのか、あるいは一部のお客さんだけでやるのか、実はよくわかりませんでした。それで、たまたまなんですけど、私がインターネットとかを覗いておりましたら、県のほうが、沖縄県の紹介をしまして、沖縄県のネットワークというものがありました、覗いておりましたら、イメージ的にどちらかというところ、民間団体とボランティアとの連絡というか、参画の手段ということなのかなと、思っておりました、それを見させていただいておりましたら、今、会長さんがおっしゃった管理人というものです、これはネットで見た感じでは石垣島のボランティア団体の何か、海のネットワーク事務局というのが中心となってされているようだと、それに県のほうもホームページをうまく混ぜて作られておりました、それでそのあとにずっと、各ボランティアが15団体くらいあったかと思いますが、その活動とか状況とか、過去の実績、今後の予定など、そういうものも、そして3番目にいついつ沖縄県でどういうことをします、ここに連絡をください、持ってくるものは何をもってきてください、弁当持参とか本当にきめ細やかな、回収分別とはどんなやり方とか、危険物とか懇切丁寧に書いてありまして、あれをばっと見れば一般のかたがたが参加する手段になりうるんじゃないかと、私は大村湾の清掃活動をしてお

りましたときに、町報に出しましたときに長崎の女子大生が4、5人来ましてね、行ってきましたということでね、いまだきの若者というのはもおるんですが、奇特的な若者もおるんだなぁと思ってですね、ネットワークというものはそういうものではないかなと思ってですね、今ききたいのですが、そういうことも可能かどうか教えていただけたらありがたいなと思います。

(糸山会長)

今、石田委員さんが言われたことはみんな可能で、基本的にはそういう方向に持っていきたい。で、さしあたっては、まあまずはこの委員さんをメーリングリストに全員入っていただいて、そこで、県とやり取りをしながら情報の共有を図っていければなぁと。その後この中に入ってきておられない方々を少しずつ勧誘していけたらというふうには思っています。だから、行政も市民団体も NPO もそういう形で入っていけたらいいなぁと思っています。問題はそのときに管理するところをどうやって作っていくのか、そのところがまだ詰めきれていないということです。不安はあるんですけど、まだきちんと作っていないです。そういうことですよ、田中さん。

(田中総括課長補佐)

目指すところは今おっしゃって頂いたことなんですが、沖縄みたいな形というのは最初に専用のサイトを作って、その中にいろいろな機能を入れるということなので、そこが今の、うちの県では単独でこれだけの専用サイトを作るということはあまりにもリスクが大きい。とりあえず、予算の問題というのが非常に大きいということと大村湾の活動とかですね、そういうのも一応作っているんですが、結局は運営する人がそのサイトをどう運営して加盟してる人からの情報を載せさせるかどうか、というところのコーディネーターがやっぱりいないのでなかなか活発に動いてないという現実があるので、私たちはまず、実際に情報をやりとりするところを掲げていきながら、更にホームページ上でもですね、告知とかはまた別途、県は県のホームページをもっていますし、皆さんももしかしたら別の団体としてのホームページを持ってらっしゃるかもしれないので、そのところのアドレス・URL を教えてあげれば、そのところはそちらを見てくださいと告知すればいいだけの話で、その辺は実質的にはおっしゃっていることができるようになるかもしれないですね。先生おっしゃったように最初はず、ここの協議会のメンバーが核になりますので、核メンバーはまず、メールアドレスを教えてください、このメーリングリストに入ってください。メールされていない方は、所属する団体とか行政側もですね、まずは県の事務局サイドは必ず入りますし、市役所、役場の方たちにも賛同の方には入って頂こうと思ってるんですね。近くにいる方、そういう方はメールネットに入れる方から、タイムラグはできますが、必要な情報提供を促してもらおうと。平行してアナログな体制をそれぞれ持ち、地域、それぞれの団体でつくっていただけたら広がるということになるかな、と思います。

(川口委員)

あの、今のお話を聞いてて、至極ご尤もだと、しかし、机上の論理、実際リアリティを持ってやっていくためには、管理人かプラットフォームのその、どこにお願いして、そこに、いかにして田中さんがおっしゃられたコーディネートをやっていただくか、ということが問題です。そのためには人的だとか、そしてその維持管理するための経費というのは関わってくるんです。事務局にお伺いします、どうお考えですか？ここに予防線引かれているからね、財政難のために、ということは、それまで含めて、本部に、その管理人に、ある団体だとかにお願いしようというのが県の考え方じゃないかと、言いたくはないけど、教えてもらえないでしょうか

(田中総括課長補佐)

あの、基本的にですね、県として、確実に20年、30年、絶対こういう形でというのが持てないんですよ。たとえば、県のホームページを作るっていうのが、いろんなところにつけてますけど、そのお金っていうのも随時、お金が付いてるって状況じゃないんですね。だから、そのこのところが、たまたまその例えば、来年度はこういう事業で要求して、すぐ付くかもしれませんが、それを結局ずっと続けるということが確約できないんですよ、そういう中で、私も今まで自然環境とかの中でそういう試みとか考えてきましたけど、結局、本当にお金のかからない方法で最低のところの仕組みを作っておいてお金のかからない方法で支えていくということしか継続できるということが確約できないという、まあ、ここは行政としていう立場と、そうじゃない部分とが入って、今、言ってるんですけども、現実はまだそういう現実があるんですよ。だから、たまたまその年は事業として付くかもわからない、そこですね、例えば、今年はこの事務費の中で一部というようなことがあるかも知れない。それはずっときちんと位置づけられるものじゃないと。その中で一番、ですから負担が少なくて、やっていけるのではないかと、いう意味でこのメーリングリストの管理人という、県のほうで出来ることは県のほうでしますので、県のほうで出来ない機能という部分がありますので、そこを最低持っただけで、後はその、意見を統合していただくということで盛り上がってくれば、そこができないかなと思ひまして。

(小岩井委員)

すみません、よろしいでしょうか、海上保安部の小岩井でございます。先ほどから話の中で、沖縄の話が出てくるかということで、沖縄のクリーンコーストネットワーク OCCN ネットというものがあまして、そちらのほうが一つのモデルということで、いろんな部分でいろんな議論があると思いますが理解しているところなんですけど、前回の会議のほう

には参加はさせていただきまして、その後、機会がありまして、担当のほうに、これは沖縄の担当のほうにですね、担当者のほうがどういう話をしているのかと実際にところ聞いてまいりました。それにつきますと、こちらのほう、やはり、それぞれの団体で環境ボランティアの方々の団体が沖縄県の中に沢山あると、そしてこのような会議というものがありまして、それはやはり、統合してみんなでまさに情報共有がしていけるというようなことと、もうひとつは情報を整理してゆく、ということが出来ないだろうかということで、スタートしたと。きっかけは平成14年に向こうのほうに美化条例というものが出来たと、なので、その条例のところに合わせてスタートしようということだった、ということで、もう10年続いているということでございます。平成14年にこのネットワークがスタートしたと、はい、10年続いていると。そのスタートするとき、やはり、どうしてもコアとなるところで、行政のところ動かかないとなと思います。コアメンバーという形で沖縄総合事務局、環境省、そして沖縄県、そして11管区海上保安部、この4つがコアメンバーとなった。ここのところではやはり、ウェブでサイトをひとつ作って、そこに皆が身を寄せ合うような形で情報交換の場にするというのがきれいだろうと、一般の方からも見られるだろうということで、どう役割分担を、予算も含めてやっているのかという議論になったそうでございます。で、そのときのスタートの時点で、どこも、役所のほうもお金がなく、スタートのところ、1年目ということで20万円ずつを行政がそれぞれのところが持ち寄ったと、というのがあって、先ほどの話じゃありませんが、継続が出来る保証はどこにもないということで、沖縄総合事務局と環境省さんはパンフレットを作ることで役割分担としますと。沖縄県についてはポスターと会計をやる。ウェブサイトの方、ホームページについては11管区保安部が当分の間、事務局をとります、という形でスタートを切ったということでございます。会員の皆様からの会費は一切取らないということ、それからまた、その活動というのを強制していくということもございませんので、その中で決めたのが、年に6月から7月の間、ここをキャンペーンの強化期間と、とにかく民間のボランティアの方々もそこに一回はできるように皆様、考えてくださいと。そのとりまとめとして5月の初旬に、このOCCNというのが、オープニングセレモニーという形でピーチを決めて、そこにボランティアの方々が集結していただいて、年1回だけ総会とボランティア活動をやるということだけが決まりごとだということだそうでございます。予算についてどうするのかという話になったときに、私が言って、じゃあ海上保安部が持て、と言われたら悲しくなるつらいところがあって、事実としてなんですけど、11管本部は沖縄県だけを所掌しておりますので、守備範囲が沖縄県と、そのまますっばりとかぶってしまうので、沖縄の海洋環境保全だという屁理屈といいますが、すべてをある意味、抱えこんだということで、自分のところの11管区のホームページ、こちらに間借りをする。予算の強弱があろうともホームページ自体が閉鎖されると言うことが組織がなくならない限り、まずないだろうということで、いま、本部のホームページの一部に間借りして環境防災課の職員がそこで手を入れてホームページを手づくりしたと。通信費ですね、ネットとつな

がる通信費だけ第11管部が、うちが持ちますよと。いうのでスタートしてやったそうでございます。つまりは非常にその、やはり沖縄県は海と言うのを観光資源としてますので、関心も強かったとして、話がいろんなところで話題になりまして、その結果の、環境関係のシンポジウムでありますとか、国際会議などの中で話題になって協賛する企業が出てきたということで、今は協賛していただいている企業から数万円いただくと。向こうからある意味良いネットワークですね、と、いうことで自発的に保険の団体組合であるとか、それからやはり海辺には必ずジュースとか缶とかあるので、そういうところからポイ捨てだということから、企業イメージということとかがあると思うのですが、飲料メーカーさんから数万円づつ集まって、大体波はありますが35万円から40万円、年に集まると、この35万円から40万円を使いましてポスターを作る、周知活動をするのと、年に一回のオープニングセレモニーの時にですね、開催費を、また、来られたボランティアの方々に対する保険等をそこから賄っていても十分あまりあるということで活動をしているということなんです。そういうことで、活動費用としてはそこから賄っているので、一切どこからもお金は出てないと言うことが実際だと言うふうに聞いてます。最新のときには665名の方が一日に県内から集まって、手弁当で集まって、一日できれいにしたとアピールをやっているということだそうです。やはり問題となったのが事務局をどうするかと言うことで、当分の間は11管区が受けておりますが、やはり今は県のほうと引き継げないかと交渉をするような交渉をしているということなんです。ノウハウは出来たので、それをそのままやっていただく、と。お金もかからないと、そういうところまで全部整理がついたので、やっていただけないかと。それと、頂く協賛金とかにはつきましては県がやっていただくということでお金の管理は実際全部県がやっているそうでございますので、11管区ではお金がかかるというときには県のほうにお願いしてコアメンバーの4者で同意をくんで、そこにアップしてネットワークの皆様にご意見を聞いて次のアクションを起こす、と、いうローテが出来上がっているということでございます。私が聞いたことは以上で、あとは事務局がどうするかというところがやはり一番大変でしょうねと、というのと、労力として、どうしても、月に一回はニュースという形で皆様から頂いた情報を整理をしないといけないうだろうというのがあって、月に一回ニュースを作る作業がどうしても出てくるねと。環境防災課の中では年に一回人事異動があって、担当が替わると味付けが変わってくるね、という風に11管区から聞いております。以上ご紹介でございました。

(中山委員)

メーリングリストにですね、東日本大震災のメーリングリストのメンバーでもありますし、宮崎のメンバーのメーリングリストもあるんですけど、ほとんど、自分が見たいものだけ見て、一人がやると言ったらメンバー全員にいくというただ単純なOCCNみたいな

のは事務局どうでしょうか。

(田中総括課長補佐)

補足させていただきますが、理想的な形としては今おっしゃった活動と言うのは、うちの協議会が、協議会本体が、もっと活動の幅を広げて、その自前の活動をするような形になったときの、ホームページであり、運営の事務局というお話であり、まず、情報共有の手段として、どういうふうにしたらいいかということで、情報共有という手段としてメーリングリストを使ったらどうかという提案です。メーリングリストの、今もてあましているのが、管理人と言うのが、メーリングリストの管理人ということなので、実際の協議会の事務局は私どもがしますので、そのメーリングリストに関しても、私たちが出来る県の方で出来る部分はするんです。ですけれども、メーリングリスト自体を開設すること自体と、人の追加登録する部分、掲示板が自動的に出来ますので、そこをアップするならアップする、と言う非常に限定的なことをどなたかしていただけないかという提案です。メーリングリスト自体は今おっしゃっていただいたように、メールでどんどん入ってきます。それはうちも反論したいということがあったらそこに返信をしていただくという、そういうごく一部分です。

(糸山会長)

ありがとうございました。小岩井委員さんのOCCNのことについてもありがとうございました。よく調べていただいて役に立つ情報で、具体的には最終的にはそういうところまで作れたら良い訳なのですが、今のところ、事務局が説明しましたように、まだそこまで、我々の力量がアップしておりませんので、まずは、その一番最初に出来るのはメーリングリストを作るというか、管理して、そこで情報を共有するということぐらいからかなという感じで今回は提案しているというものになってます。だから後は、その、メーリングリストの管理をする仕方をどうするか、ということになっています。他にございませんか？

(山口委員)

理解していないんですが、これをつくった場合に、県の事務所のパソコンは、全部メールはできないのか？

(田中総括課長補佐)

メールは大丈夫です。メールで来る分には大丈夫なんですけど、このメーリングリストの中でメールのやり取りだけしか使わないなら良いんですけども、メールのやり取りで送れない写真とかなんかがあったときに、ホームページに載せるということが、このメールリストを作るとできるんですよ。ページがもらえるんです。ホームページを自動でもらえるようなイメージなんですけど。それに画像や写真を載せたりすることが出来るので、その部分だけが私たちが出来ないんですよ。だから、皆さんが、ひとまずはメールでやり取りするだけで、活動状況の写真とかも、こういう風なこともありました、とかの添付ができるくらい小さいサイズの写真とか、皆さんが、我慢していただければ、私どもも同じものが同じようにやり取りできるという訳です。

(山口委員)

県も市町村も一緒だろうけど、私どもの団体もセキュリティを最近ものすごく強化しているんですね。で、どんどんはねてられるんですよ。一般のものをウェブサイトで見ようとしたら、今度新しくウェブサイトじゃないようですが、とるとしたら、セキュリティの強化したどこかの管理者が作るようになったら、それにも金がかかるのではないかと、思った次第で、それは関係ないんですか。

(田中総括課長補佐)

多分、有害サイトをはねてる。怪しいのははねてると思いますので、役所とかきちんとしたプロバイダーでつくるのは、はねるっていうのは通常無いと思います。

(糸山会長)

その辺は費用はかかりませんか？

(田中総括課長補佐)

私たちはホームページは作ろうとは思ってないので、それ自体はかからないです。

(川口委員)

今のやり取りを聞いてて、ひとつ確認です。ぜひ、整理していただきたいのですが、最終形は出口の部分としてですね、この漂着ごみに関して言いますと、これはエンドレスです。ということは、この協議会、あるいはそういうプラットホーム、こういったものを時限的なもの、と言う捉え方は必要なのか否か。時限的に。そしてこれを例えば、そして最

終的な出口として、小岩井さん言われたOCCNみたいなものに、最終的には持っていきたいとおっしゃった、じゃ、逆に言うとそれを出口とした場合に、逆算して、今、一番やるのがメーリングリストを作ること。次のステップとしてのロードマップとしてまず考えることが必要。その感じで言うと、どこにどれだけお金がかかって、どれだけの人材が必要で、その人材は、例えば、管理、移動でもって、味付けが変わるとかある意味、県内の漂着ごみに精通している人だとか、いろんな意味合いの条件と言うのが出てくるはず、そういうものをもう一度今日ここで結論出せないと思う。メールを作る分には困らない。ただし、そういった一番最後の出口の部分まで、大局的に見た上での議論をしないと継続性というのが損なわれてしまう。それは何かというと、モチベーションが下がる。せっかくこんなのを作ったのに、どうしたの。何の為のネットワークなのと。最初に石田さんがご提案、ご質問にあったように、どういったものをネットワークと位置付けてるのか、そういった議論なくしてですね、私はいろいろ言いたい、現実問題と理想の部分ときちんと整理したうえで議論を進める必要があると思うんです。

(田中総括課長補佐)

私も役所の今の立場としての考えと、もし民間の立場になった時にどうなのだろうかというところも含めて考えたときに、今おっしゃったことも確かに、今から30年なのか100年なのか分らないんですけど、取組自体は続いていきますよね。ただ、将来形が、OCCNというのはひとつのタイプの究極の形なのかな、という感じはしますが、この協議会なり、長崎県の漂着ごみのネットワーク本体がですね、OCCNのような形で役所主体ですよ、ここは。

(川口委員)

そもそも考え方が違う、最初にOCCNの4つの団体、行政の団体がここに座ってする前に最初にあるのは民間なんです、その中で一番皆さんに声を掛けやすく、そしてその上で皆さんの賛同を得られるのはどこかといったときにこの4つだったんです。それを間違えないで。

(田中総括課長補佐)

分かりました。はい、だからうちの県が沖縄のケースみたいな形で、将来、全県的な、割としっかりした団体を作るという状況になるのもひとつの方向性だと思います、もしかしたらそこまでの形ではなくて情報共有がずっと続いていけば、それぞれの地域でそれぞれの団体なり、地域単位のつながりでもってずっとやっていける、と、言うこともありうると思うんですよね、その将来像というのが、皆さんそれぞれ思い描くことはあると思うんですけど、これだというのがもちろん必要だと思うんですけど、今の時点では定める

ことは難しいのではないかと思います。その中でまず、長続きの話、大事と思いますが、モチベーションの問題と言うのはもうひとつ、途中で、同じやり方をずっとしていると下がるというのはあるというのはおっしゃるとおりなんです。ひとまず、お金の問題もほとんど必要なしで、ひとまず情報共有という手段をずっと続けられるということでのメーリングリストの提案をさせてもらったということなので、決してこの先のことは描いてないわけではないけれど、決められない状態での選択という風に、提案ということで考えてます。

(石橋委員)

私は川口さんの意見とは少し違うんですけど、要はこの会議は念に数回しか行われませんよね？その中で何か議論をしようとした時に、ほとんど意見が出ないんですよね。例えば、僕が五島とか壱岐や対馬でしている事業のことを知りたいとしても、どんなふうにアクセスしてよいかわからない。それをメーリングリストさえあれば、五島ではこんな活動をやりますよ、とか、ポンと送っていただいたら、皆さんが分かれている。で、そこに僕が参加したいと思ったら参加できる。ただ、それだけでも良いように感じる。そのためのメーリングリストを作りましょうと、情報交換の場を作りましょうということだと思うんです。そのときに沖縄のようなすばらしいものが出来ればそれに越したことはないかも知れませんが、僕はわざわざそこまで作る必要もなくて、ここにいる皆さんの情報交換の場としても良いような気もしますけど、その中でメンバーも増えていけば、増えたナリ情報が集まってくるわけで、それが無いというのがこのメンバーの欠陥じゃないかと思ってるんですがいかがですか。

(川口委員)

石橋先生の意見も理解したのですが、その上で、なにが、次にそれだけで良いかといわれたら、それでも良いというならそれは賛同します。ただ、糸山先生がおっしゃった緩やかな連携という意味で言えば、その上でただ、県のほうも、この中で理想としての物を描いてるんですよ。こういう段階で、OCCNとはいいいませんが、そういったもので会員を徐々に増やしていこうという、そういったものでやるんだから、反対ではないけども、各人、想定しても構わない。私はそれを否定もしない、ただ、そういった腹案もありますからと、県も言ってますから。そういったものはみんなで共有したら良いんじゃない、その上で今出来ることは、MLからがいいんじゃないと。もうちょっとステップアップ出来ないの。ご提案が出てきたら、その中でやっていきましょう。ただし、それを管理人という言葉でいわれる、これが非常にコーディネートやるうえで、県のほうで山口さんのご指摘のようなシステムでいうなら県でもやっていけないことはないのかな、ということで。

(田中総括課長補佐)

すみません、管理人に対してかなり幅広い感じを皆さんに説明をしてしまったのですが、実際はもし、仮に誰かが、「私、したことないけど、メールは使えるよ」という方がいたとします。セキュリティ上もそんな厳しくかかってない方がおられるとした時には、私たちが、私は一度、県でもまだ緩やかだったときに、管理人やっていたことがありますので、行って、パソコンの横で、一緒に、こうして、こうして・・・ということも出来るんですよ。一度、人を登録するやり方を覚えれば、それはメールが使える人なら出来るのでクリアできると、まずそこを一番お願いしたいことですので、コーディネートの話は、皆さん誰でもコーディネートは出来るんですよ。みんなと同時にやり取りが出来ますので、メール上で話すことが好きで、メール上で人の話を引き出して頂けるような方がいらっしゃればその方が実質的にコーディネートの役割を果たすことができるということです。

(糸山会長)

どうもありがとうございます。僕も一番最初に思っていたのが、石橋委員さんが言われたようなことを一番最初は想定した。ただ、それだけでは多分済まないだろうと思ったのは、情報としてここにはいらっしやらない方で、まだ、情報を必要とされる方がいますんで、そこら辺の人たちも、例えばこのメーリングリストの中に入れていただけるような格好にしとかなくてはいけないなあと。私が頭の中に描いてるのが、そういう中で情報をいろいろやりとりしながら、この海岸でこういう清掃活動をやるよ、とか。10月何日にこういうことをやるよ、とか。この海岸の写真が出て、ゴミがこのくらい溜まってるとか。そういうのがあったら行ってみようかな、とか。10月何日にみんなで対馬に集まりましょう、とか。その時に良いので、それを総会にしましょうとか。こんなことが出来たら良いなあと思ったのが一番最初の発想でした。事務局とつき合わせながら、どういう格好で提示したら良いのか、提示の仕方そのものも、ほんとの所、これでいいのかと、思いながらしているんです。他に何かご意見ございませんでしょうか？基本的には先ほど事務局からも説明がありましたように、メールが使える人ならば、中にずっと入っていける人ならば管理人になれるよ、ということもありましたが、田中さん、私でも管理人になれるよね。ひとつ足を踏み出してみたいと思ってるんですよ。メーリングリストだけでも作っていきたい、どういう風になるか分かりませんが、一辺メーリングリストを作ってみて、場合によっては私が作るということになるかも知れませんが、そういうことで、一歩踏み出して情報を共有できるような、そういうものを作っていけたら良いなと。そういう中で私が一番大事な想定しているような、緩やかな形での結合体が出来たら良いなというふうに思っているんですけど、まずは、ここまではよろしいでしょうか。じゃ、メーリングリストをどなたが管理するとかは置いていてください。本当から言えば僕は、NPOで

あるとかそういうところでやっていけたら一番いいなあと思ってるんですけど。こういうふうにしようと思いますとか、次回の集まりの時に話が出来たら良いなと思ってますので。今、NPOのところで、うちでやって良いよというところはございませんか。メーリングリストの管理者ならば良いよというところですね。

(田中総括課長補佐)

皆さん団体で、個人じゃないから。また後で、お持ち帰りいただいて、こちらにご一報頂けますか。もしその上で難しいということでしたら、糸山先生お願いしてよろしいですか。

(糸山会長)

その意味で言えば、後でどうにでもなるんですけどね。とにかく今ここで、仮にもどうこうとか出来そうにないので、それぞれのメールアドレスとかは今でも分かるんですか。

(田中総括課長補佐)

メールアドレスはほとんど頂いてないようなんです、何人かしか。まずそこからですね、役場のほうと直接話をして頂いて、何かつなぐような形で、登録の為のアドレスか何か、名刺をお渡しすればアドレスが載ってますのでそこに送っていただけたら、そういう形でお持ち帰りいただいて、お引き受けいただける場所はお知らせを頂く、と、そこからはじめていく、と、いうことでやっていこうと思いますがよろしいでしょうか。

(拍手)

(山口委員)

ただ、県は登録以外の人には送れないんですよね？

(田中総括課長補佐)

添付ファイルを送るときに、登録が必要なので、登録さえすれば大丈夫です。添付ファイルも送れます。メール本文は全然OKです。メールアドレスは団体を希望しますか、個人を希望しますか、それぞれで、ダブルで入っていただいても良いです。

(糸山会長)

他にご意見はありませんか？次からは一步踏み出してみたいと思いますので、それでは、そういう格好でやらせてもらおうと思います。肝心なところはどうなるか分かりませんが、

ぜひ、私を信用していただきたいと、ではよろしく申し上げます。この間、第6回から本回までの間にいくつか、例えば対馬の清掃活動とか事業がありましたし、それから中山さんのところでは、この間富山に行っていたし、そのご報告をお願いしたいと思いますので、では中山さんからお願いいたします。

(中山委員)

中山です。今日は突然言われたので今日は資料を持ってきてませんが、覚えてる範囲でさせてもらいたいと思います。8月の18・19に富山県の氷見と、富山市でですね、東北アジア環境保全プログラムということで、イベントセミナーがありまして、日本海に面した国、韓国、ロシア、中国、日本ですね、この4カ国の青少年の人たちが海洋環境についての討論会というのを行いました。私たち壱岐のほうから出席できないかということでしたので中学生を二人、高校生を二人合計4人連れてですね現地へ行っただけです。約60人くらいの子供たちが中国やロシア・韓国から集まりまして、18日、一日目は午前中にいろんな地域の取組、事例を発表しましたけど、先ほど申しましたけど、壱岐としての取組、あるいは海岸の漂着ごみの状態を皆さんの前で通訳してもらいながら10分くらいの内容なんですけど、漂着ごみに関してはみんな驚いた状態で、こんなにあるんだ、と、みんな、シーンとなった。パワーポイントは県から向こうに預けた状態で提出しております。向こうのほうはレクレーションみたいな感じで海水浴の間にごみを拾う状態で、日本のごみの状況が分ったんじゃないかと思います。また、さきほどの件と関係ありますけど、担当者のほうから、このことに関しては子供たちも言わないでくれということでした。

午前中はそれで終わりました午後からは漂着物を利用しましたアート製作、これがびっくりするくらい出来るんですね、8グループくらいに分かれまして、いろんなテーマを自分らでして、作るわけなんですけど、その完成度というか発想というか、これにはもう驚きました。何時間かかけて作られる訳なんですけど、よっぽど、危なっかしいところとか、釘のうち方に関しては手を出しますけど、発想自体はみんな任せてますので、それを完成させたときに発表があったんですけど、子供なりの発想というかですね、これには驚きました。内容というのは富山の海岸で集めたものだったんですけど、壱岐からも持ってきてくれということで私もパックいっぱい持っていきました。それでその発表がありまして、その後、夜は各国から来たということで、浴衣の着付け、日本の浴衣を子供たちに着付けて、その格好で富山の郷土芸能、太鼓とか踊りとか、環境問題だけではなくて各国の交流、そういうふうなことも含めて行われました。

二日目は朝から漂着ごみ拾いですね。富山の能登半島の根っこですね、富山の海岸のものすごく長い海岸なんですけど、ごみがないですね。あるのはあるのですがごみの種類が違うんですね。壱岐とか対馬とか発泡スチロールとか色んな有機物というか、そういうのが多かったんですけど。むこうは木材とか海草とか、発泡スチロールとかないんですね、ごみを拾うときの分別とかしないんですね。袋に見ついたらそのまま入れるという取組なん

で、なんかちょっと違うなぁということでした。そのあと地引網をしたんですけど、これもロシアとか中国とか子供たちは大喜びですね。私たちは壱岐ではしょっちゅうしているのでたいした事はなかったんですけど、ごみ問題だけじゃなくて海洋生態についても勉強したということで、それで、午後は残りの議題発表、講師の方がプロの海のダイバーが海の中の生態について話してました。女の子二人、男の子二人の4人で行ったんですが、その男の子がすっかり影響されて、家に帰ったら英語を勉強するよと、これだけでもすごいんですけど、大人同士で韓国の人たちとメールアドレス交換したり、環境問題プラスの国際交流ということがありました。これは各国持ち回りで、去年はロシアのウラジオストクで行われたそうで、来年はどうなるか分かりませんが、出来たら長崎県でもですね、会場として、どうかなと思っております。

(糸山会長)

ありがとうございました。ではこの間、10月7日でしたか、対馬で漂着ごみの日韓海峡という行事がありましたので、大浦さんお願いします。

(大浦委員)

対馬市の大浦と申します、先ほど糸山会長から御紹介ございまして、10月7日にご存じないかもしれませんが、上県の井口浜というところで日韓ビーチクリーンアップというのを実施しました。これは平成15年から行ってございまして今年で10回目ということでございます。対馬市と釜山外国語大学がボランティアとして糸山会長をはじめ、ここにおられる何人かの方々に参加していただきまして、本当に心よりお礼を申し上げます。結果報告になりますが、釜山大学から70名程度、地元の対馬高校から50名程度、地元の一般市民の方、島外のボランティアの方、スタッフ合わせて2百数十名参加いただきまして、実績の漂着物の内容については資料を持ってきておりませんので、概略の報告とさせていただきます。トン袋でだいたい380袋、かなりの漂着物がありました。

特に私は今回始めてクリーンアップに参加したんですが、印象に残ったのが9月の中旬に発生した台風16号の影響かなと思うんですが、木くずが非常に多かった、だいたい6割から7割を占めてたんじゃないかなと考えております。先ほども少し話が出ておりました医療系の廃棄物、どこからのものかは確認は出来ませんが、量的には、かなり少ない量ではございましたが、そういった廃棄物が混入してるという現状を見たときにですね、本当にびっくりしました。これをもし、何かの拍子に私たちの体に刺さったりとか、そういうことになった時のことを考えたときに、背筋の凍る思いでした。それと今後なくす為にはどうしたらいいか、今から検討をすすめて行かなくてはならないと思いました。

釜山外国語大学の学生さんたちが、韓国のごみの多さというのも実感していただいたのではないと思う、先ほどから出ている、犯人探しはしないであるとかいうことが出ておりますけど、私は現状は認識していただく必要があるのではないかと。普段、個人個人の

話では全くシャットアウトして、ただし、現状はやはり認識していただいた上で将来に生かしていただきたいと思う。毎年70名から100名程度の釜山大学の学生さんが来られますし、対馬高校の学生さんもおります。その学生さんたちが将来大きくなって、子供さんを産まれて育てていく中で、漂着ごみが他の国にどんな影響を与えているのかと、教育指導といったところまで、勉強が出来るような、将来、子供さんたちにそういった指導が出来るような体験が出来たのではないかという風に考えたときに、やはり、これは将来的に続けていく必要があるな、と、そういった中で私たちがどうかかわっていくべきか、と、考えていきたいと思っています。これは先ほどから出てますように、終わりのない事業でございます、来年も再来年も10年後も20年後も長く続けていくことと思います。協議会からもご指導を仰ぎながら今後も事業を進めていきたいと思っていますので、今後とも宜しくお願いします。ありがとうございました。

(糸山会長)

ありがとうございました。私も行ったんですけど、最初行ったときに上から見ていたんですけど、今日は少ないなぁと思った、ところが、後で聞いたら、トン袋で380袋と聞いたから、そんなにあったのか、と正直言ってびっくりしました。そして印象深かったのが韓国の釜山大生の学生さんの中で、年齢はもう少し上なのかもしれないけど、兵役を経験した人でしょ？まぁ力の強いこと！！びっくりしましたね！やっぱりそういう鍛え方があるんだな、と非常に感心したしだいです。まだ清掃がストップした状態のところも帰りに見えましたもんね、まだ本当はあるのになぁと思いながら、本当に終わりのない活動ですので、まぁ今年もこれで対馬も綺麗になったかなと思いながら、まぁ、だけど、来年、もこんなになるんだろうなぁと。去年、一昨年も御前浜の海岸でも多かったなと、今思い返すと当時のことが思い返せるんですけど、まぁ、とにかく皆さん元気にやっていかないと、と思っています。ほかに皆さんの方からありませんか。

(川口委員)

県に聞きたいんですけど、廃棄物対策課なんですか、未来環境推進課がありますね。あちらに散乱ごみを少なくするという、ポイ捨てとは違う、散乱ごみを減らそうという考え方がある。実は、何が言いたいかというと、実は例えば海岸に、漂着物じゃないんだけど、故意に生ごみを捨てる人がいるようなものは未来環境課ですか、廃棄物対策課ですか。

(小嶺課長)

不法投棄だったらうちだと思います。不法投棄は廃棄物対策課です。

(川口委員)

実は細かいことを申し訳ないけど。やはり、生ごみを海岸に捨てる行為を目の当たりにたまにするんですよ。そういった対策はどうしたらいいですか。以前もらったんですが、不法投棄監視中というステッカーを車に貼ってただけど、そんな関係ないよね。廃対のほうから言われたのは、直接ストレートに注意をしたりとか、そういったことはするなど。見かけた時に電話をしろと。やっぱりそういう地域にね、一回、この話しをしたときに糸山先生からご注意を受けたのですが、細かいのかもしれない、長崎県内に家庭の生ごみを捨てるような地域があります。どういうふうな啓発といいますか、対処の方法をご検討頂けませんか。

(山本委員)

私、古い生まれじゃなくて、戦後なんですけど、海岸のそばで生まれ育ったんですけど、小さいときはビニールごみとかそういうものはございませんでしたよね。まず新聞紙に物を包んでいただく。そしてそれが風呂のたきつけ、薪のたきつけになる時代ですから、その時代は必ず残飯を海に捨てて魚の食べ物、そして、そのまま海に流れていってしまうというような、そういう育ち方を、生活の方式で、多分、中山さんも壱岐ですので、年代もそう変わりませんので、そういう意識だと思います。それをそうじゃないですよ、と、ごみは変わったんですよ、と。壱岐島環境問題を考える会なので、ずっと指導しておりますけど、まだ、お年寄りはその所に捨てられます。で、それを中国の方はお家の裏の水路にぼんぼん捨ててあるから、やがてはそれが海に行ってるのかな、という感覚ですね。

後ひとつ、先ほどから海岸漂着物がありましたとか、ありませんとか、海水浴場がある月山というところは南の風のとときしか、南の海岸ですので、漂着物はほとんどございせん。北側にある海岸には必ず漂着物がありまして、それも夏場は全くないところがあります。冬になるともう石が見えないくらい漂着物がございます。拾えばすごい量の漂着ごみを壱岐の焼却場に持っていかなくてはいけなくて、知らない顔して春まで待ってたら何もなくなります。そういう状態ですね、海のそばに住んでいるということは。私たちがどこまでどうすればいいのかというのがなかなか分らないんです、で、今日も保健所、ちょうど日程がかぶったんですけど、^{くよしほま}清石浜という所で漂着物の調査が行われているんです、区画を切って医療廃棄物とかあったときには必ず報告はされてると思うんですね、先ほどから犯人探しじゃなくて、法的に決まってることは他国にも物申していいんじゃないかなというふうにお話があったんですけど、そういうものがあがってきたら必ずどこかで取り扱っていただいているのかどうか。毎年毎年私たちは調査をしてるんですけど、その結果がどういうふう国内や国外に流されてるのかな、というのが私たちのところには戻ってまいません。以上です。

(糸山会長)

事務局おさらいしてください。

(小嶺課長)

さっきおっしゃった調査は、東アジアの6カ国の自治体連合、先ほどの中山委員さんが行かれた富山を事務局としてるんです。やはり、他国に対してもですね、そういうデータというのはちゃんとお示しはしてると思います。そういうデータが戻ってきてないというのにも確かにあるんですが、うちもそういうデータが入手できれば皆さんにはお知らせしたいと思います。それから、不法投棄の話ですけど、やはり、指導等、普及啓発それ以外にはないと思います。最後はやはり個人のモラルの問題になってくるんですね。で、粘り強く啓発をしていくしかないかなと思ってます、そういう面で市町村の広報誌とかですね、県の広報誌とかで伝えながら粘り強くやっている。県民、事業者、行政が一丸となってますね、不法投棄を許さない社会づくりをしようというふうに思っておりますので、協力をお願いしたいと思います。

(小岩井委員)

粘り強く指導というお話がございましたが、それが文字通り魚の餌になって終わるとい程度じゃないようなレベルに至った、あるいはそのような形で家庭ごみを常習的に海にもって行く、ごみの日に出すのは面倒くさいというので出した、という方がおられますので、そういう場合の判断もございますので県を通じてでも結構でございますので、通報いただければうちのほうが刑事上の対応をできる場合もあります。

(糸山会長)

やはり粘り強く啓発活動を行っていかないといけないですね。漂着ごみといえば漂着ごみではあるので、そのうちその辺も考えていこうかと思えます。時間が参りましたので、そろそろ終わりにしたいと思いますが、他に伝えておきたいことなどございませんか。よろしいでしょうか。では一番最後にですね、次回の開催予定日についてお願い致します。

(三谷課長補佐)

メーリングリストの作成のほうは早速今日から進めさせていただきますが、会議のほうはですね、今年度は終了しまして、来年度の5月下旬開催を予定しております。また日程が決まり次第、新年度になってからですけど、お知らせしたいと思いますので宜しくお願い致します。

(糸山会長)

今年度はもう無いと、来年の5月以降ということでございますけどよろしいですね。どうもありがとうございました。それではこれをもちまして第7回海岸漂着物対策協議会を終了いたします。事務局にお返しします。

(小嶺課長)

本日は熱心に長時間にわたり協議いただきまして誠にありがとうございました。第1回から、ずっと、このネットワークというのがひとつの課題ですね、今日は集中的に議論していただきまして、一応、形としてスタートできるというところまでできましたので、次回にはメーリングリストを活用しながらご案内が出来ればと思っております。今後とも宜しくお願い致します。本日はどうもありがとうございました。